【座談会】

中川小十郎研究のこれまで　これから

立命館　史資料センター

〈はじめに〉

私学　立命館の創立者　中川小十郎については、戦後十分な研究がなされていなかった。

一九五九年頃から小十郎の諸史料は徐々に集積していたが、一九九一年から始まった『立命館百年史』編纂において、ようやくその輪郭を描く必要から、史料の選別利用が始まった。

一九九九年に『立命館百年史』通史一が刊行され、小十郎の人物像の輪郭が描かれ、戦後通説として学園内に口伝されていた「小十郎像」とは異なる部分が多いということが指摘された。

学園内の通説とは、「小十郎は国家主義者であり、専横的経営者であり、戦前の立命館の国家主義的傾向はこの創立者が生み出したのだ。その象徴が禁衛隊だ。」というものであった。しかし、そうすると「京大瀧川事件」で自治を守って闘い退官した京都帝大の教官を、立命館が大量に受け入れたのはなぜなのか、十分な説明ができなかった。

むしろ学園内の通説は、戦後、末川を象徴として歩んだ「平和と民主主義」立命館を際立たせるための

「ヒール役」という役回りが与えられた故なのかもしれないが、二一世紀になってもまだ通説がそのまま一般に膾炙される状態であった。

二〇〇九年　小十郎の実家からの最後の大量の史料が移管された。

この時、初めて　創立者　中川小十郎の本格的な歴史的研究に着手することになる。

文学部　山崎有恒教授をリーダーとし、日本近代史を専攻する若手研究者・院生・学生のチームである。

それから一〇年の間、小十郎の事歴の研究は着実に進み、二〇一五年には史料目録が完成し、二〇一六年の小十郎生誕一五〇年の年には、歴史的評価に耐えうる小十郎像を公に発表するに至った。以後も史料を基に、小十郎自身、小十郎を取り巻く諸時代の研究成果発表が相次いでいる。

この座談会は、小十郎の歴史的研究に取り組んだメンバーによる、「中川小十郎研究のこれまで　これから」の記録である。

〈座談会出演者（中川小十郎研究グループ）〉

山崎　有恒　立命館大学文学部教授
長谷川　澄夫　立命館　史資料センター調査研究員
奈良　勝司　広島大学人間社会科学研究科准教授
寺澤　優　立命館大学衣笠総合研究機構　専門研究員・授業担当講師
藤野　真挙　東義大学校人文社会科学部助教授
眞杉　侑里　立命館　史資料センター調査研究員、立命館大学授業担当講師
十河　和貴　立命館大学大学院　文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程
小林　愛恵　立命館大学大学院　文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程
木多　悠介　立命館大学大学院　文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程
奈良　英久　史資料センターオフィス　職員（事務局）

※座談会に関わる資料は、末尾にまとめて掲載している。

〈座談会〉

二〇二一年一〇月一八日（月）午後三時～午後五時　ＺＯＯＭにて開催

○山崎

それでは、今日の座談会を始めます。今日の趣旨を最初に簡単にご説明申し上げます。

中川小十郎の関係文書の研究を、この間、一〇年ぐらいにわたってやってきましたが、それがどういう経緯で始まり、どのような展開を経て、どんな成果を生み出したのかを整理するとともに、現状を踏まえ、未来の研究はどういう方向へ進めていけばいいのかという展望まで含め、中川小十郎研究の過去、現在、未来について話をしていきたいと思っています。

今日、座談会に参加された皆さんは、当初からのメンバーもおられれば、最近加わった方もおられると思いますので、まずは自分がいつ頃、どういう経緯でこの研究に加わったのか、主として担当してきた研究分野は何で、どのような視点からこれまでどのような研究をなされてきたのか、その過程で見えてきたものは何なのかを話していただきたいと思います。

さて先ずは私の場合ですが、そもそもは中川小十郎の関係史料の整理・研究をしないといけないが、どうすべきかという相談を、史資料センターの佐々木雅美課長から受けたのがきっかけでした。二〇〇九年に、小十郎の生家史料が史資料センターに入ってきた。すでに一九八二年に養家のほうの史料は入っていて、これで両中川家の史料が揃った。では具体的にどうやって整理したらいいのかという相談を受けたのです。

そのとき私は、西園寺文書の整理に関わっていたのですが、中川小十郎の史料も大量にあり、段ボールで運び込まれているので一回見に来てくれないかという依頼を受け、その後それを見に行ったというのが、僕の最初の関わりだったと思っています。

そのときに、これはかなり膨大な史料があるので、一回ちゃんと目録を作って整理して、それからそれぞれの内容について研究していく必要があるよねという話をしました。ところがその直後に私が韓国の高麗大学校に一年間、（客員）研究教授で行くことになったため、関わりはいったんペンディング、帰国後中川史料の整理を本格的に始めたいという要請を受けて百年史の編纂室に出かけました。その段階では今日も参加していただいている長谷川さんがすでに嘱託で雇われていて、少しずつ整理を進めてくださっていました。あと私の紹介で文学部日本史学専攻からアルバイトを送り込み、今日も来ている寺澤さんと松平智史君、田村悠君がいましたね。

それで二〇一一年の九月に私が留学を終えて帰ってきて、そのときにいろいろと話をして、研究会を立ち上げようかと。それも、いわゆる研究者だけの研究会ではなくて、史資料センターの職員の方も加わって、教職員共同でやろうよという形で研究会を立ち上げたのが、二〇一一年の秋ぐらいからと記憶をしています。

私の手元の記録では、二〇一一年の一二月九日の金曜日に第一回の研究会が行われています。この研究会の幹事を務めてくれていた田村君を、よく考えたら今日の会に招聘すべきだったと、思いますね。まあ、いずれ彼からも、京都橘大学で職員をされているので、聞き取りをしたほうがいいかなと思います。

さて研究会立ち上げの段階で、奈良勝司さんと藤野真挙さんにも私のほうから依頼して加わってもらって、

あと、亡くなった田中有美さんと、それから吉田武弘君をメンバーに加えました。史資料センターからは佐々木さん、奈良英久さんの二人に加わっていただきました。

その体制で二〇一一年から一二年にかけて、読みにくい書簡の翻刻作業を進めていくとともに、それまで概要が明らかになっていた史料群を、各自の関心に応じて担当を決めて、それで研究、分析するという、たしかそういう経緯でしたよね、私の記憶が確かならば。まあそんな感じで、それぞれ担当、分担を決めて研究して、それを発表するという形で進めた覚えがあります。

取りあえず、私がこの研究グループに加わるまでの経緯というのは、そんなところだと思っています。

ちなみに、立命館大学における中川小十郎研究の歴史についても、ざっと振り返っておく必要があると思います。まず戦前に中川小十郎の伝記編纂が計画された形跡があります。そのあたりの史料も若干ですが残っています。ただこれは完成稿になる前に、研究自体が途絶しているようです。また戦後にも中川小十郎の研究グループがつくられ、調査研究活動が進められた形跡が見られるのですが、これも特に大きな成果を残さないまま、日の光を浴びずに終わっています。

その後、しばらくの時を経て、奈良さんたちと一緒に始めた中川小十郎研究会が今に続く一〇年間のスタートだったと思っていますが、この認識で合っていますでしょうか。

はい。取りあえず、私のほうから当初の経緯についてお話しいたしました。

〈中川小十郎研究のこれまで〉

それじゃ、初期メンバーだった奈良（英）さん、奈良（勝）先生、寺澤さん、藤野君、そして長谷川先生に、参加された当初のお話をお願いして、それ以外の現メンバーに関しては、後で、いつ、どういう形で加わっていったのかって話をしていただこうと思います。

じゃ、職員の奈良（英）さんからいきましょうか、はい。

○奈良（英）

私は、小十郎研究会、山崎先生の主幹される研究会のところでは、二〇一一年の冬に、当時の佐々木課長と一緒に参加してるんですけど、小十郎関係史料の中から中川小十郎が自分自身の家系の履歴を調べていった経過文書を担当しましたね。ただその文書がバラバラの断片だったので、つなぎ合わせて要約する作業でした。素人作業になってしまって、研究者の皆さんには迷惑かけたなというのが非常に強く残ってる印象です。それから禁衛隊の結成に関わって小十郎が行った講演原稿の要約で、どのような意図をもって結成したのかの発言を要約する作業も行いました。あとは小十郎の講演録から「教育観」に関わる部分を抽出して、世の状況がどう変わっても、小十郎は一貫して「学生の学習が第一」ということを発表した記憶があります。

現在は、原史料に直接関わるのではなく、職員の立場から全体の研究状況の進捗を見るのと、学内や学外に「見せてゆく」ためのコーディネーションをやっています。

皆さんにお配りした年表などは、これまで小十郎の年譜を画期に区切ってみて、研究成果を入れ込んでみたものです。そうするとどの画期がまだ研究が進んでいないかがわかるのです。

あわせて、法人の立場からしますと、創立者の中川小十郎ですから、やっぱり最終的には伝記を発刊しないといけない。特に私学は創立者の精神が私学の存在意義になりますので、研究成果が最終的に「中川小十郎伝」に結びつかないといけないと思っております。

山崎先生もご尽力された学祖・西園寺公望は伝記編纂がなされていますが、やはり私学の場合は学祖ではなくて、創立者が伝記としてまとめられていないと、と感じます。

これまでのところ、先生方の諸研究や説得力ある山崎先生の仮説があって、中川小十郎の人となりの輪郭がはっきりしてきたと感じますが、大正時代の台湾銀行頭取時代、昭和初めの禁衛隊と京大事件当時の小十郎の心情、西園寺の秘書としてあるいは小十郎個人としてどのように政治に関わっていったのか、私学経営者としてはどうなのかなど、まだ研究の余地がたくさんあるなと思っています。

学園としての目線で関心を持っているのは、これは多分先生方のご専門とはちょっとずれるのかもしれないんですが、立命館中学に対しての中川小十郎の関わり方、この部分のところなんかは、ずっと深めていくと中川小十郎の物の見方、考え方が直接的に出てくる部分だろうなというふうに感じています。

○山崎

はい、ありがとうございました。

台湾関係のことに関しては、台湾銀行関係の史料がないのですよね、中川の史料の中にはね。だから、やるとしたら本格的に史料調査かけて、台湾銀行関係の史料のほうから中川を浮かび上がらせていくしか方法がないのですが、現体制では難しいですよね。

あの研究会は、各自の興味、関心で、今ある史料の中からセレクトして研究を進めてもらったので、そこから漏れ落ちる部分はたくさんありますよね。だから、今後、今までにない切り口を幾つも検討対象として挙げて、伝記編纂につなげていかなければいけないと思います。

次は初期メンバーですね。長谷川先生、お願いできますか。

○長谷川

私は、一三年前に京都の高校の教員を退職しました。最後の勤務地は中川小十郎の出身地の亀岡の高校で、授業のかたわら『新修亀岡市史』に執筆の機会を与えていただきました。そのご縁からか、退職後の二〇〇八年、中川小十郎の出身地である馬路町自治会からお話があって、町史編さんの編集のお手伝いをさせていただくことになりました。

町史編さんの作業の過程で、小十郎の生家である通称「堀ノ内」と呼ばれる禄左衛門さんの子孫のお家が史料を処分されるということになり、大量の史料が出てまいりました。その事を当時の百年史編さん室の課長であった斎藤さんに連絡しましたところ、斎藤さんのご尽力によって大量の史料は立命館に引き取っていただくことになりました。そして、馬路町史の本（『我がまち馬路』）がほぼ出来上がった時点で、斎藤さんからお声かけいただきまして、二〇一〇年四月から堀の内の生家史料の整理作業を始めさせていただくことになりました。まあ、いったん廃棄された品物で、ほこりだらけのゴミのような史料だったんです。百年史編さん室の手で何回か燻蒸は行われてきましたが、運搬のために詰め込まれた段ボール箱のほこりを払いながらその概要調査を行いました。事務室の宮崎さん、先ほどご紹介のありました寺澤さんや松平さんと一緒

に、箱ごとに史料の大まかな内容や点数の調査を行いました。白衣に白手袋のいでたちと、ほこりまみれの作業でした。その次の年からは田村さんも参加されまして、小十郎研究会の立ち上げが行われました。

生家の堀ノ内の史料の整理がほぼひと段落したところで、図書館貴重書庫の史料の調査や、養家の武平太のお家の史料の再整理と作業を進めてきました。藤野さんや眞杉さん・十河さんといろんな方が参加され、若い研究者の方々のお手伝いをして楽しく作業させていただいてきました。

○山崎

長谷川さんは、最初からずーっと加わっておられて、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

次に、奈良（勝）君、いきましょうか。

○奈良（勝）

私は、二〇一〇年代初頭の、先ほど山崎先生がお話しいただいた研究会を始めようという際に声をかけていただいて、それで実際やったことというのは、体制づくりとか運営というところはほとんどタッチしてませんで、幕末維新期の研究者として、関連する史料の読解、紹介、それから研究をつくり出すという、専らそういう点に主に力を注ぎながら研究会に参加させてもらいました。

史料紹介とかは、他の方は小十郎関係の史料を紹介される中で、私は、主には中川小十郎の生まれる前ですね、幕末時期の父の禄左衛門とか叔父の武平太関係の史料が結構残っていましたので、その紹介を進めていくという、そういう作業をやってた記憶があります。

途中、自分自身が、二〇一二年から一四年度まで韓国の大学で奉職することになったので、一時的に日本を離れて、その間はちょっと離れていたんですけれども、また二〇一五年から立命、京都に戻ってくることになって、その同じタイミングで、二〇一五年から三年間ですね、人文科学研究所の助成プログラムで中川家文書の総合的研究というのを申請して、採択してもらって、それでちょっとバックアップも得ながら、よりその活動を進めて、ここにいるメンバーのうちの何人かの方にもご参加、ご協力いただいて、まあもうそろそろ形にしていこうということで研究活動を続けていって、具体的には二〇一七年と一八年かな、二年ぐらいの時期に集中して三本ぐらいですね、ここの史料を使った論文を私自身は発表させてもらったりしました。

もらった参考資料だと二つ紹介されてるんですけど、もう一つ、亀岡の亀岡市文化資料館の図録に載せてもらった論文もありますので、まあ後でちょっと訂正させて、補足させてもらおうかなと思いますけれども、内容としては、小十郎が生まれる前の話なので、直接彼の人生とかに関わることではないんですけれども、彼が父とか叔父からどういう影響を受けていたかという、父とか叔父が結構悲惨な目に遭ってたということが研究を進めていく中で、悲惨な目というか、波乱万丈の人生を送ってたことが分かりましたので、間接的にではあるんですけれども、中川小十郎という人格が形成されるバックグラウンドというのがよく理解できたというのが収穫だったかなと思います。

その意味では非常に面白い史料で、いろんな学問的発見もあったので、もう少しまだできることもあるので、引き続き、続けていければなと、そういうチャンスがあればなというふうに思っています。

○山崎

ありがとうございました。次に、奈良さんよりも先に参加されていた寺澤さん、お願いします。

○寺澤

私は、先ほど先生からご説明があったとおり、私がＭ１の頃、たしか二〇一〇年ぐらいに、夏休みに山崎先生に呼ばれて、何だろうと思って行ってみたら、中川家の史料を受け入れたと。これを立命館で保存するんだが、史料を整理する人員が足りないから、おまえ行ってくれないかということで声をかけていただいて、まだ初々しい松平君と二人でのこのこと行きました。すると、齋藤さん（職員）と佐々木課長さんと、あと井上雅人さん（職員）がおられて、それで案内を受けて入ってみたら、長谷川先生と宮崎さん（事務補助職員）がおられて、その隣に史料が山積みになっていて、それを整理しようということで始まりました。

ただ、その頃、山崎先生が言われたように、私たちのアルバイトが始まってすぐ、山崎先生は韓国に行かれて、それで、何をどうしたらいいのか分からないＭ１が二人並んで、長谷川先生に、これ何ですか、あれ何ですかと聞くところから始まって、そこから何となく概要を調査しないといけないということは分かり、概要調査を始めていきました。でも、そもそも、どさっと古文書をそのまま受け入れたような状態だったのですが、まずどういうものが入っているのか、とかをある程度長谷川先生が調査を始めていて、その作業を補助していくような形で最初は始まりました。

ただ、長谷川先生がよく、これはもうごみやとか、こんなもんは要らんやろというぐらいの、本当にくしゃくしゃの、煤にまみれたような史料なんかもあったりして、それをどうやって選別していくのか、勝手に捨

てちゃいけないだろうから、どっかに置いとくのか、どこからがちゃんとした古文書なのかみたいなことを決めていくことから始まりました。M1としてはそんなノウハウもないので、三人で相談しながら、時に長谷川先生の知識とか、いろんなことを借りながら概要調査をしました。

私のほうも、途中、留学と、あと学振と、あと妊娠・出産で結構出たり入ったりしていたんですけれども、その一期のときは概要調査になりました。留学をした後に帰ってきて、山崎先生と、あと奈良（英）さんと奈良（勝）先生と藤野先生と佐々木課長と長谷川先生たちとの研究会に参加させてもらって、そのときにアルバイトにももう一度復帰しました。

そのときから妊娠・出産で一旦辞めるまでのアルバイトが一番やっぱり印象に残っていて、そのときに、概要調査ではなくて、史料をきちんと公開できるように目録をきちんと作って整理をしていって、箱に詰めて番号を振るという作業が必要になってきて、そのあたりも最初のほうは全然理解を、してたような、してなかったような感じでした。その後「何年以内にこういうことが必要になるのでやってください」という分かりやすいタスクみたいなものができまして、そこから二年ぐらいかけて、整理作業と目録作成に取り組んでいきました。

途中で藤野先生が入ってくださって、すごく助かりました。その時作業していた史料数が何万点かな、史料の総数忘れてしまいましたけど、何千点、何万点とあるものを、そもそも来歴が分からないものもすごくあって、その来歴をどういうふうに表記するか、それ、もともとどこから入手した、もらった史料なのか分からないのをどういうふうに分類していくか、誰が見ても分かるように史料番号をどの時点で打っていくの

か、史料をどこで、一件一件どこで分けていくのかということをすごく、割と短いスパンでものすごくいろんなことを詰めながら、一から指針をつくって話し合って、じゃ、こうしましょうということを一回一回話し合いながらやっていた記憶があります。

それが一応形になったのが、私が学振でバイトを辞める前の二〇一五年の三月ぐらいだったと思います。現物の史料は一件一件、できるだけ封筒に詰めていって、それに番号を振っていって、それを出納できるようにする、そして史料に件名をつけて目録を作成してファイルに綴じるという、この中川家史料の現在の形の土台ができたのがそのときでした。

それができたこと、それを一応やり遂げて一旦仕事を終えられたのはすごくありがたくて、その後、学振が終わってからもう一度復帰させてもらったんですけれども、その後の業務は割と研究に近いことになっていて、まあ正直、これ業績にもなるし、羨ましいなと思いました。それが、皆さんが、その頃にはもう新しいメンバーとか眞杉さんとかも入られて、すごくワイワイやっていて、楽しかった記憶があります。

今は、もう専門研究員になって、一旦そちらは離れたので、実際に皆さんに貢献できるようなことは何もないんですけれども、授業とかで時々、中川小十郎の話をするようにして、創立者はこういう人だから、皆さん興味持ってくださいねみたいなことは言ったりしています。それぐらいしか今はできてないですが、そういう状況だったので、私は毎回、長谷川先生に会うと、すごく若い頃の記憶が戻って、何というか、ちょっとうれしい気分になるので、今日もちょっと、何というか、ちょっとうれしいです。

○山崎

ありがとうございました。

じゃ、名前も出ましたので、藤野さんお願いします。

○藤野

皆さんからたくさんお話がありましたが、私は、最初は山崎先生がつくられた中川小十郎の研究会、そちらに参加をさせてもらうということで、初めてこの中川家史料に関わることになりました。

そのときには、様々な私の事情もありまして、何も分からないまま行って、与えられた史料を読んで、何かそれで議論しましょうみたいな感じでした。ただ、与えられた史料を読んでも、分かることが少ないなといった感覚を持っていて、それ以上深くは中川家史料に興味を持つということはありませんでした。ただ、二〇一四年にちょっと何か仕事を探さなければならないというときに、寺澤さんに史資料センターを紹介してもらいまして、中川家史料にまた関わるようになりました。

そこからが本格的に私が史資料センターに関わるようになったんですけれども、ただ二〇一四年というのは、先ほど寺澤さんからもお話がありましたように、目録の作成作業が佳境に入っているような段階で、私としては、仕事に入ったはいいんですが、当時ＯＤでしたけれども当然口を出せるわけでもなく、作業の方針等々が決まっている中で、寺澤さんと長谷川先生、当時このお二人だったと思いますが、二人が作業をしている横で私も史料の整理をしていました。史料の整理をするというのは、これは時々笑い話として話すのですが、封筒に入った封筒を封筒に入れるという、あの作業ですね。なんでこれをやっているんだろうと

ちょっと半分思いながら、そんな作業が約一年続きました。でも、その間、寺澤さんと長谷川先生がいろいろ、史料について話をされているのを横で聞きながら、ああ、そうか、こんな史料なんだということを耳学問で勉強させてもらったという記憶があります。

その当時は、佐々木課長がいらっしゃって、二〇一四年度末に目録の作業が一旦完成をするんですが、二〇一五年から、寺澤さんもいらっしゃらなくなり、同時に課長も山本課長に代わられました。そこからですね、二〇一五、二〇一六の二年間が、私が指揮というか、中心になってやるようになった時期だと思います。寺澤さんがいらっしゃらなくなったので、どうしようといろいろ悩んだんですが。

そこで私が関わった作業というのが展示、史料展示の業務でした。基礎作業が一応終わったところで、山崎先生もご講演なさいました、中川小十郎の生誕記念講演会が二〇一六年にありまして、そこへ向けての前作業というか、広報事業も兼ねた史料展示会というものを何度か実施しました。それに関係して亀岡の文化資料館とも関わりが出てくるわけですけれども、そういった他機関との史料の貸し借りをしたりする中で史料を展示し、そしてそれに関係する論文集などを作っていく、図録集などを作っていくという作業に関わりました。それが二〇一五年、二〇一六年のことです。

それで、二〇一七年に、現在の職場になる韓国の大学へ行くことになるんですが、そこに行くときとほぼ同時ぐらいに、それまで二年間の作業の集大成として、『中川小十郎研究論文・図録集』ですね、こちらのほうが出るということになりました。そこの編集作業にも関わりました。

それで、私がやった中川関連の研究は、基礎作業、基礎研究の部分を寺澤さんがしっかりとなさってくれ

たので、その目録等を使いながら、自分が関心をもっていた中川小十郎の少年期から青年期にかけての生い立ちの部分ですね、つまり何で中川小十郎が学校創立事業に関わっていったのか、そこに至る彼の経験というものがどのようなものだったのか、人脈というのがどういうところにあったのかというところを具体的にやってみました。

そうしますと、実は中川のそうした部分への研究というのは、なされていたようで意外と分かっていなかったことが多くて、例えば私が書いたところでいえば、学歴についても結構あやふやになっていた部分というのがあったんですね。そちらについては、早稲田大学の史料を使いながら確定させていきました。さらに中川生前の伝記編纂プロジェクト、昭和期ですね、昭和期にあった伝記編纂プロジェクトの中で、中川が実際に回想していたこととはちょっと違う当時の中川の経験も明らかになりました。簡単に言うと、中川謙二郎を中心とした教育関係の人脈の中で中川小十郎は学生時代を過ごしていた。中川本人は鉱山事業等に興味があったということを伝記編纂プロジェクトのなかでは回想していますが、しかし当時、本人がやっていたこととというのは、森有礼文政をサポートするような教育団体（教育報知社）で幹事をしていたり、叔父の中川謙二郎が教育家であり、また学者でもあったので、中川謙二郎の関連の学者の人たちとの交流があったりということで、結構、教育関連の基盤というのが中川小十郎の中で培われていたんですね。

それによって、それまで語られていたような中川小十郎の生い立ちの部分を詳細に、そして学校創立事業へとつながっていく一つの物語の一端を描くことができたかなというふうに思っています。

ただ、その後、私は韓国の大学に赴任しましたので、実際その後は全てというか、ほとんどの話を眞杉さ

んにお任せする形になりました。

○山崎

ありがとうございました。

一旦、ここで初期メンバーのお話は終わりになるので、ちょっと簡単に整理しておきましょう。

二〇〇九年に入った史料を、二〇一〇年の終わりぐらいにかけてか二〇一一年ぐらいにかけて概要調査を行った。長谷川先生、寺澤さん、松平君あたりを中心に進められ、一旦の概要が出た。ここまでが第一段階。

第二段階としては、二〇一一年の冬から始まる、大体二年間ぐらいやっていた記憶がありますね、中川小十郎研究会ですね。これが二〇一一年から二〇一二年にかけて、書簡の翻刻をやると同時に、とにかく面白そうな史料を見つけて、それについての何か紹介をしていくという感じで進めた。亡くなった田中さんが、夏休みは要らんと中川が言っていた話を報告して、とても印象に残っています。この話はたしか紀要にも掲載されていますね。

その後の話についてはご存じない方も多いと思うんですが、実はこの第二段階の成果をもって、二〇一三年度の科研費を申請しようとしたのです。田村君を中心に申請書類を作成してね。その目標が「中川小十郎の伝記を作る」だった。具体的にはこの研究会の成果をそこから三年ほど積み上げて、中川小十郎伝を作ろうという計画で、それで科研費の申請をしようとしたところ、学園の上層部からちょっとストップが入りまして、中川小十郎は、いずれ学園として伝記編纂をすべきもので、一部の個人で関わるのは止めてほしい、毀誉褒貶が多い人なので扱いを慎重にしなければいけないということで、制止が入ったのですね。それで、

二〇一三年の段階で、研究会は一旦中断ということになりました。

とはいえ、いつかはそれを学園としてやることになるだろう。であれば、それに備えて基礎的な地固めをするしかないなと。ということで、我々研究チームとしては、史料の整理を続けて、きちんとした目録を作って整理して、それで翻刻すべきものは翻刻してという形でやるしかないなという話になりました。それでその後は、さっき寺澤さんが言っておられたとおりですよね。二〇一三年から一四年ぐらいにかけてかな、目録作りがずっと行われていたということですね。

ところが、このあたりの事情は良く分からないのですが、伝記編纂については制止がかかったのに、二〇一六年に中川の生誕一五〇年記念がやってくるということで、大学として記念行事を企画しようということになるのですね。風向きが二転三転するので、我々現場としては非常にやりにくいのですが、とにかく企画展示をしようということで、藤野君を中心に企画展を行い、図録を作ったのですね。この図録は中川小十郎の研究成果としても貴重なもので、その後の研究論集刊行の弾みとなったように記憶しています。

それでは、その後の動きについて新しく加わってきたメンバーに話していただきましょう。眞杉さんからいきましょうか。

○眞杉

ちょうど初期メンバーの方とちょっと入れ替わる形で私は入らせていただきまして。

多分、寺澤さんと入れ替わりかなというぐらいですね。目録の紙の形のものが出来上がった段階で入りました。

ただ、最初の一年目というのは、まだそういった史料活用、公開という話というのは出ておりませんで、まだ残っていた目録化、整理の残り作業というのに最初は従事をしたことを覚えています。来て、初めて中性紙箱を大量に組み立てる作業をしたのがいい思い出なんですが、個人的には大変好きな作業なのでウキウキ通っていたんですが、その翌年ぐらいから、いわゆる周年事業ですね、生誕一五〇年ということで、何か展示をするに当たって小展示をできないかということで、三回に分けて、三期に分けて、今の朱雀のピロティのところ、細かくちょっとだけスペースを借りて作業したというところから参加をさせていただいていました。

なので、今までの皆さんの史料整理の成果を基にして、少しずつ何か言えることがないのかなというところにちょうど立ち会ったという形になるかと思います。

そうですね、最初の一年目というのは、立命館内にある史料というのはもう把握ができているので、外に中川の史料がないかななんていうこともちょっと探しながらということでした。二年目以降は、そういった展示ですね、史料活用というほうで協力をさせていただいたように覚えています。

その頃、私は、もう全然、中川小十郎自体のこともあまりよく分かっておりませんで、二年目、三年目頃かな、大きな周年事業の展示の際にどこかを担当しましょうということで、ちょうどそのとき空いておりました樺太に渡った時期ですね、明治末期頃というのを担当させていただいたという形です。

それで、何本か論文も書かせていただきまして、そうですね、図録と、それから私が入った後の大きなトピックとしては、いわゆる『史資料センター紀要』というものが定期刊行されるようになったということで、図録に引き続いて、ちょっと樺太のことをもう少し深く掘って書いてみようなんていうことをしたように覚

えています。

私も、ちょっと一年、間が一旦空いておりまして、また戻ってきて現在に至るという形なんですけれども、そうですね、研究の面では、私はいわゆる中川あるいは政治家とか学校教育関係というのは専門ではありませんので、その時々で自分の興味が湧いたものをつまみ食い的に執筆させていただいているような形にはなっているかなと思います。

ただですね、いわゆる史料整理であるとか史料把握というのは、周年事業のあたりまでおおむね成果が出ているのかなと思いますので、それを踏まえて、いわゆる中川に興味がないような人でも、すごく面白い史料なんだよということが言えたらいいのかなということで、ここに、史資料センターにある史料を使いながら、決して中川が専門ではない人が書いたらこういう論文になるんじゃないかな、中川家史料の、立命館、中川に限らない可能性みたいなものを少しでも出していけたらいいのかなということで幾つか書きました。

その展示が終わって、紀要も定期刊行、ついに五号ということで、大分軌道に乗ったかなと思います。

この間は、基本的には中川家史料の整理というのも終わってますし、活用という面では、皆さん、ご尽力いただいているのかなというところですが、間で西園寺家の史料が史資料センターに正式に移管をされるということがありましたので、その際に中川家史料の目録の取り方、形式とかなどを踏襲させていただいて西園寺公望関係資料の目録というのも作成をさせていただいているというような状態ですね。

私のほうからは、それぐらいかなと思います。

○山崎

ありがとうございました。

樺太はね、随分眞杉さんによって開拓された気がしますね。

それでは次は、十河君、よろしくお願いします。

○十河

先ほどから皆さんのお話を聞いていて、何となく自分が入ったときの流れが分かったなというふうに思うんですけれども、私は二〇一五年に、たしか学部の四回生で、その年からちょうど藤野さんが山崎ゼミのほうに補佐でついてくださる形になって。

○山崎

あ、その時代か。

○十河

そうです、そうです。そのときから藤野さんとのつながりができまして、ちょうどそのときに、先ほど眞杉さんが言われたように、当時小展示をいくつかやっていたんですよね。その展示のチラシを藤野さんがゼミのときに配られているのを見て、それで、中川小十郎関係の史料が、結構あるんだなというのを把握しまして、それで、そこから自分の研究をやっている中で、何か中川って面白い人物だなというのを、いろいろ史料を読みながら思っていたときに、まあ、やっぱり学部生のときって、取りあえず史料があったら食いつくじゃないですか。それで、中川の史料があるということで、藤野さんにアルバイトで入れてくれませんか

というふうにお願いしまして、それで二〇一六年の、たしか二月か三月かぐらいから入ったように記憶してます。

それで入ったときには、もう寺澤さんが、全ての形を整えてくださっていましたので、本当にもう目録も全部そろってる状態で、二〇一六年の展示の、生誕一五〇年の大きい方の展示ですね、その仕事の手伝いとして加わらせていただく形になりました。そのときに、展示の一つのスペースも任せていただいたりと、すごく幸いで、そういう経験ができました。それで図録のほうの論文も書かせていただいたりと、かなりその大事業に携わることができたので、一年目で何も分からなかったんですけれども、大体の流れを自分の中でつかむことができたということですね。

ところが、僕が一年間、展示、図録を経験した直後に藤野さんと眞杉さんが同時にいなくなるという事態を迎えまして、たしか。だから、僕がいきなり一年、リーダーにならなきゃいけないみたいな状態になりました。それが二〇一七年の四月からですね、恐らく、はい。

そのときに、ちょうど小林さん、木多君が、藤野さんの紹介があってこのチームに加わるようになった長谷川先生も含めてという形になったんですけれども、このときの僕の仕事としては、大きく三つありました。一つは木多君、小林さんがまだ学部生の状態だったので、そこで崩し字を読めるようになってもらおうということで、崩し字を教えたりしながら、まずは読めるようになってもらうという形で、田上綽俊の書簡の翻刻というのをやりました。これが紀要の創刊号に載ってます。それと、もう一つは台湾のことで、これは後でしゃべりますけど、台湾の研究を進めること。

そして最後の三つ目として一番大きかったのは、藤野さんが中心になって図録を作ってくれたときに、その後も論文を書いて研究成果を発表し続けていくというのが、先ほど寺澤さんからも羨ましいと言ってもらえましたが、やっぱり業績にもなって、一石二鳥ですので、ちょっとこれは続けたいなという思いが自分の中でありまして、奈良さんに相談して、紀要の創刊号を作るということで、藤野さん、奈良勝司さん、寺澤さん、眞杉さん、山崎先生とそれぞれ声をかけて、それで創刊号を作ることができたというのが自分の中では一つすごく大きいことかなというふうに思っています。

それで、台湾のことが、中川の台湾の時代、台湾銀行頭取の時代がいまいち分かってないということで、僕、まだ当時は素人だったんですけれども、まあ意地でも台湾の研究をやってやろうということで書きました。

そのときに、ここの史料、本当に台湾銀行関係が少ないんですけれども、それこそ伝記資料の中で、すごく中川が面白いことを言っている史料があったんですね。それが「分化主義」ということを言ってるものなんですけど、これを中心に書いてたんです。それが驚くほど自分の研究と適合的なというか、自分の研究とすごい関心が近いことを中川が言っていたので、何とか論文として書くことができました。そうですね、台湾銀行時代の論文をそこで書けましたので、その後は、台湾から帰ってきた後の中川の活動も意外と誰もやってなかったので、西園寺との関係で論文を書いたりというふうに、基本、そのあたりの研究を中心にやってきたという形なんですけれど、ただ、その研究自体も、現在、かなり一段落、出尽くしたかなという状態が一方ではありますので、ここからは、やはりここの史料をもう少し外部に公開していくというような方向で進めていくべきかなと思っています。眞杉さんが戻られてからは、そこを中心に、現在、整理等々も進めて

いっているような状態です。

○山崎

ありがとうございました。

話にあったように、ちょうど十河君の参加前後を機に初期メンバーの就職が次々と決まり、京都を離れるということで世代交代が進み、十河君がリーダーにならざるを得ない状況になるのですね。そこで体制強化のために木多君、小林さんの二人が入ってくることになります。それでは参加の経緯と現在の作業状況について、木多君、小林さんからお話しいただけますか。

それでは、木多君からいきましょう。

○木多

私が史資料センターに来させていただいたのは、二〇一六年に山崎ゼミに学部三回生で入ったときに、副担当に十河さんと同じく藤野先生がおられまして、二〇一六年の冬頃に、藤野先生から史資料センターというとこがあって、私はそこに行っていろいろしているんだけど、今度、韓国へ行くから、また勉強にもなるし、おまえたちにやる気があるんだったら論文とかも書けるよということで、行ってみないかということで声をかけていただきまして、それで史資料センターに来させてもらったというふうな始まりになります。

それで、最初、史資料センターに来たときはですね、史資料センターというぐらいだから、どういうところなのかなと思って行ってみたら、冷房をガンガンに効かせた資料庫みたいなところの一角に机がぽんぽんぽんと置いてあるというところで、結構びっくりしたのを覚えています。

○山崎

あれ、冷房効き過ぎだよね。いつも行くたびに思うのだけれど。

○木多

はい、びっくりしました。それで、そこで一番最初に言われた仕事が、多分十河さんたちも、私たちに何をやらせるのか、ちょっと戸惑ったと思うんですけど、中川家の史料が箱にいっぱいあるんですけど、それが全部番号どおりに並んでいるか確認をしろと、抜けているものがあったら教えろというふうな仕事を命じられました。それを一個一個全部数えていって、ええ、多いなと思ったのを覚えております。

それで、それが終わった後に、先ほど十河さんが言われたように、おまえたちには崩し字を読めるようになってもらうということで、十河さんが用意していただいた崩し字の書簡なんかを小林さんと一緒に読み、しばらくたったら、十河さんと長谷川先生が、そのとき文字起こしをしていた田上綽俊書簡というのがあると。それで、長谷川先生と十河さんが一旦文字起こしをしたデータと書簡の写真を渡されまして、チェックをしてみろということで史料翻刻をさせていただいて、それが私の名前も載せていただいた紀要の一号の田上綽俊書簡の史料紹介ということになります。

その後は、新たに史資料センターに持ってこられたり受け入れたりしたような西園寺の史料であるとか、そういったものの整理を皆さんと一緒にやりながら、自分の研究としては、昭和初期の禁衛隊の研究をさせていただきました。大体、この禁衛隊とか昭和の頃に立命館がやったことというのは、中川の主義主張に天皇中心主義というのがあるから、それに沿ってやっているんだろうという理解を百年史がしています。これに

対して、その全てを中川の主義主張で片づけるのではなくて、学園でやっていることだから、学園の経営と突き合わせながら検討していくことが必要なんじゃないかということで、ひとつの事例として、立命館禁衛隊というのは学園の経営にとってはどのようなものだったのかなということを調べて書かせていただいたということになっております。それが、去年書いて、今年出た紀要ですね。

それで、今現在は、先ほど寺澤さんたちがおっしゃっていた、今まで整理作業をしてきた中川家の史料が、実際、何月何日に誰によって持ち込まれてきて、今の状態で整理されたのかということを、あまり把握をしていなかったので、その辺のことをしっかり把握しようかということで、小林さんと一緒に調べております。

○山崎

ありがとうございました。

では、小林さんお願いします。

○小林

私が史資料センターで関わった仕事内容については、今、木多君が大体説明をしてくださったので、私は史資料センターでの個人的な思い出とか、自分がやった研究についてのお話しすることで、ちょっとお時間いただきます。

私が史資料センターに関わりはじめたのは、ほぼ木多君と同じ時期、二〇一七年の春前というか、四回生になる前の春ということになります。正確に言えば、木多君よりも私のほうが一か月くらい早く史資料センターに関わることになりまして、私が初めて勤務したくらいの頃は、みなさんはちょうど図録の校正がもの

すごく忙しくて、大変そうで、新人に構っていられるような時間などないみたいなような状況で、ああ、何だか申し訳ないときに来てしまったなというのが最初の思い出です。

その後すぐに、藤野さんや眞杉さんが史資料センターから退職されて、十河先輩についていく形になったんですが、今思い出しても、先ほどの十河先輩の話を聞いても、ああ、何だかそこまで歳も変わらないのに、いろんな重荷を十河先輩ひとりに背負わせてしまう形で業務を進める風になってしまったなと本当に申し訳なかったです。木多君はどう思ってたか分からないですけど、わたしはどの作業も十河先輩がリーダーのときには十河先輩の後ろをついて回って、できることをして、眞杉さんが戻って来たら、眞杉さんの後ろをついて回って、できることをしてという感じで、正直に言えば、眞杉さんや十河先輩いなくなったらどうしようみたいなこともちょっと思いながら、現在まで史資料センターの業務に関わらせていただいたという感じです。

私個人が特に関わった作業は、田上綽俊の書簡の整理であるとか、それを史料紹介という形でまとめて紀要に載せるとかということが二〇一八年春くらいまでのことだったと思います。

その後、私の個人的なテーマとして、禁衛隊について研究することになりまして、私は昭和大礼全体の警備体制の概要であるとか、警備を運営していくその体制の中で立命館禁衛隊がどういう立ち位置にいたのかであるとか、どういう役割を持っていたのかみたいなことを論文として書かせていただいて、二〇二一年三月の紀要に載せていただいたという形になります。

今現在は、特に一九八二年寄贈の養家関係の史料や、伝記関係の史料の整理の経緯であるとか、その目録

の作成の過程であるとかについて整理する作業を、木多君と長谷川先生と中心にやっているという形です。

そうですね、この作業の中で、八十年史や百年史の時に書かれた小十郎関係の史料整理の状況に関する論文を何度も何度も読む機会があるんですけど、何ていうか、私が史資料センターに関わった時点では、大きな史料整理みたいなことは全部終わって、新しい作業、とにかく紀要を書くみたいなこと、そういう作業が中心というか、そういう方針であったので、私が全然経験していないものすごく地道な作業の大変さであるとか、特に八十年史のときのものすごい混乱を感じて、ああ、私が今当たり前に史料を使って研究をして、誰かの後ろをついてって働くことが何とかできているのも、何かすごくそういう、これまでの積み重ねがあったからだなということを感じる日々です。

○山崎

ありがとうございました。

○藤野

あと、今日、参加はしていない人なんですが、実は、史資料センターで働いていた学部生がもう一人いまして、せっかくなので、ここに関わった人、みんなの名前が上がっているので、お名前を、ここで上げておきたいと思うんですが、菊池なぎささんという方が二年半ほど、学部生のときに関わりました。

私が史資料センターで働いていたときに、同時に非常勤講師として文学部の史料講読の授業を担当させてもらっていて、それを菊池さんが受講していたんですね。私、史料講読の授業の中で、史資料センターの見学、そしてそこで生の史料に触れるというような授業をやっておりまして、そこで、今は募集していないの

だけど、史資料センターとかでも、もしかしたら人を雇うときがあるかもしれません。その時は誰か働けますかねみたいな話をしていたら、菊池さんが史資料センターに突然電話をかけてきまして、今は募集してないと聞いたんですが、先生、何とか私を働かせてくれませんか、みたいな、すごい働きたいですみたいな感じの雰囲気で迫られました。そこで山本課長に話をし、彼女はそこから二年間、日本史学科の学生としては非常に珍しいですよね、史料の整理に直接関わるようなアルバイトをして、そして卒業していきました。ここで私のほうから紹介をさせていただきます。

○山崎

菊池さんは懐かしいですね。なるほど、そうか、キックーがいたか。はい、ありがとうございました。大体いいですかね、そんなところで。

〈中川小十郎研究のこれから〉

○山崎

それではここからは、「中川小十郎研究のこれから」ということで、話を進めていきましょう。ここに至るまでの経緯を踏まえ、現状で分析が進んでる部分と、まだ十分に話されていない課題について整理していきたいと思います。

その前に、当時参加されていたみなさんにちょっとお聞きしたいのですが、『中川小十郎研究論文・図録集』は、誰が、いつ、どうして作ろうということになったのでしょうか。個人的にはこれがその後の研究の

基調を作ったような気がしていて、史資料センター紀要に受け継がれ、現在に続いているように思われます。これは一体どういう経緯で始まったものなのでしょうか。

○奈良（英）

『中川小十郎研究論文・図録集』を作るきっかけは、事務局からの提起です。

その背景だけ簡単に申し上げますと、二〇一五年の三月に目録が完成したのですが、このタイミングというのが、ちょうど学園が四月にＯＩＣを開設するタイミングだったんですね。そのこともあって、立命館を外にアピールしていくというのをトップが積極的に始めるんです。そのときと重なるんですよ。この目録ができた話と、二〇一五年後期の朝ドラが「広岡浅子」で小十郎と縁が深いし、二〇一六年は小十郎生誕一五〇年だからこの機会に外向けに創立者アピールしませんかと伝えますと、なるほどということになって。同時に二〇一五年には広報課主管で「立命館人物伝」というマンガ集発行の企画もあって、白川静先生のマンガができていたんですね。じゃ創立者のマンガを作りませんかといったところ即ＯＫで、広報課予算持ちでマンガ製作も進んだんです。

こりゃ上げ潮だと思ったんですね。「時と人と金がそろった」と。展示会や講演会を立て続けに実施したり、二〇一六年一〇月のシンポジウムがあんな大きな規模になったのも、トップが乗ってきたということが背景にあるんです。でも、イベントはその場限りで継承されないので、中川小十郎の生誕というのとタイミングを合わせて、しっかりした今までの研究成果をまとめましょうということで企画したものが『中川小十郎研究論文・図録集』なんです。

もう藤野先生中心に、みなさんに頑張ってもらって、すごくいいものできたなと思っています。展示にしても図録にしても、その時、積極的な若手研究者がここにいたからこそ実現できたものだと思ってます。マンガと図録集は、現在まで学園内（小学校や附属校・大学）や学外研究機関や校友にくばりまくっていますね。ここから、小十郎の認知度が学内外でぐっと上がってきたのを実感しています。

○山崎

なるほど。よく分かりました。

僕も、このあたりから学園の空気がじわじわと変わりつつあるのを感じています。それまではどちらかというと学園の黒歴史のように扱われ、右寄りで戦前の国家主義を体現していたような人なので、学園としてはあまり軽々しく表に出したくないという空気で、まるで危険な核物質のように扱われていたのが、一五年から一六年ぐらいにかけて、中川を歴史の中に封じ込めるだけではだめだ。良い点も悪い点も史実としてきちんと検証しないといけないという空気が醸成されてきて、中川小十郎を取り上げる企画があちこちで企画されるようになりました。私のところにも講演会の依頼がばんばんやってきて、学園の空気が変わり始めてきたなあというのは私もすごく感じました。きっとここにお集まりのみなさんの努力が実っていったのでしょう。感謝しかないですね。

さて、こうして藤野君苦心の企画展とその図録が出て、これがまたとても評判が良く、その後『史資料センター紀要』発刊へとつながっていくわけです。その創刊号には私も論文を寄せさせていただいたのですが、そこでは右翼であり国家主義であった中川小十郎と、教育者としての中川小十郎は、しっかりと分けて検討

した方が良いのではないかということを論じているのですね。中川小十郎は個人的な政治活動においてと、立命館学園の経営者としてでは、まったく違う顔を見せている。個人的な政治信条としては確かに国家主義であって、それは立命館禁衛隊などの政策となって学園史にも影響を与えてはいるのですが、同時に学園の経営者としては他校を放校処分になったような左傾学生も受け入れるなど、清濁併せ呑む、懐の深いところを見せているのですね。そしてその理由も、西園寺公望の私塾立命館以来の建学精神、すなわち誰でも学べる、誰にでも広かれた学びの場でありたいとする学園の理念に基づいている。立命館はその草創期から誰でも来て学べる学校であり、必ずしも高等学術の蘊蓄を究めるわけではないかもしれないが、小学校を出て、その後もっと学びたい人に誰でも学べる高等教育を提供することで、藤野さんの言うところの中等社会の充実を目指していたわけですよね。そしてこうした教育理念が、実は戦後、そして現在の立命館学園につながってくるのですよ。

「立ちゃん」なんて呼ばれる苦学生でも学べる、誰にでも開かれた学校としての立命館学園の歴史は、中川小十郎の教育理念と重なる部分が多く、中川によって築き上げられた学園の建学精神が戦後、そして現在の立命館学園にきちんと受け継がれているという見方もできるわけですね。そうなると戦前の部分だけを黒歴史として切り捨ててしまうのではなく、草創期に形成された学園の教学理念がその後の歴史にどのようにつながっていったかを、一度きちんと検討して、しっかりと評価しないといけないのではないかと思うのです。中川イズムのどこが継承され、どこが変わってきているのかを、パンドラの箱のように閉じ込めず、一回ちゃんと開けて、ちゃんと研究をして、それできちっと論じてみるべきなんじゃないかということを、僕なりに

訴えたつもりでいます。

近年、中川小十郎をきちんと創立者として取り上げようという動きが、二〇二〇年前後にかけて非常に多くなってきて、立命館の対外的な講演会とかでも中川小十郎を取り上げたものを積極的にやらせていただいたりしていて、ようやく潮目が変わりつつあると感じます。

というわけで私は、そろそろ学園として中川小十郎伝編纂室を設け、そこで専任の職員や研究者を雇いながら、本格的に五年、一〇年かけて研究と編纂事業をやっていく必要があると思っています。

さて、それでは次は、幕末維新期を中心に研究していた奈良先生、いかがですか。

○奈良（勝）

かなりマニアックな話になってしまうかもしれないですけども、そもそも僕が、もともと最初に中川の史料を見たのは、実は、先ほどはお話ししなかったんですけども、二〇一〇年より前の時点でして、二〇〇四年か五年の段階で、まだ百年史の編纂室のほうかな、末川会館のほうに史料があったんですけれども、そちらに史料を見に行ったことがありまして、それは幕末の自分の研究をする一環として、徳川慶喜の研究をやってたんですけれども、その絡みで史料を見に行ったということがあります。

なぜ、それが手がかりとして分かったかというと、千九百、ちょっと記憶でしゃべるので確実じゃないかもしれないですけども、六〇年代から七〇年代ぐらいにかけて、たしか岡本さんという方が、経済学部の方なんですけれども、立て続けに小十郎の父親とか叔父が、幕末に人見・中川両苗という血族集団として社会活動、一部政治活動をやっていたという事実が実はあってということを明らかにされてたんですね。それが、

すごく面白い研究だったんですけれども、何かその後、引き継がれなかったというか、岡本さんご本人も別の研究に移られて、そのうち立命も何か出られて、九州のほうの大学に、九州大学やったかな、に移ってしまわれてみたいな感じで、その後、もう何十年間も手つかずの状態で、学会でも一切そういうのをされてなかったんです。

実は、先ほどのときも少しお話ししたんですけれども、人見・中川両苗という、お父さんとか叔父さんが活動した幕末の動きというのがすごく面白くて、何が面白いかというと、いろんな魅力があるんですけれども、一つは、ミーハーな分かりやすいところからいうと、誰もが知ってる人物が登場してくるんですね。一つは、一橋慶喜、後の徳川慶喜がすごく関わってくる。またそれに加えて、新選組が関係してくる。さらには、今年の大河ドラマ、渋沢栄一ですけれども、実は渋沢栄一も出てくるんですね。

たとえば渋沢栄一は、若いとき、慶喜の部下、大河ドラマでも強調されてましたけれども、慶喜の下っ端として働いていました。実はその時に、慶喜のもとに陳情に来た小十郎の叔父さんたちを追い返す役回りをしていたことが史料からわかります。そういうことは、これまで全然知られてなかった新事実です。だから、僕としては、岡本さんの研究という土台を受け継ぎながら、でも、もう半世紀近く前の研究だったので、ちょっといろいろ刷新していかなくちゃいけないところもあるし、史料的にも、先ほどご説明いただいたように、新しい発掘とか統合とかというのがあって、すごく厚みを持たせて、よりそれを広げてカバーできるような環境が整ってきましたので、それを基に研究を進めさせてもらって、幕末に父親、叔父さんたちがどういう活動をして、どういう目に遭ったかという点を大分明らかにすることができました。

詳しく言うとちょっと切りがないので、あんまり詳しくは言わないですけども、それはすごく、自分でやったから言うわけではないですけれども、立命館学園はもちろんのこと、学界的にもすごく面白い大きな成果だと思います。

先ほど言ったような有名人物がたくさん出てくるってこともありますし、あと、一つだけ言うと、研究のジャンルを飛び越えるんですね。皆さんも心当たりあると思うんですけれども、自分は政治史の専門家だとか社会史の専門家だとか地域史の専門家などという何となくの自覚、あるいは文化史が専門だとかいった感覚でもいいんですが、それぞれ皆さん、何か軸を持ってる、どうしてもそこ中心になるというのがご研究されてもあると思うんですけれども、この中川家史料というのは、政治史、社会史、地域史、それら全部を横断してカテゴライズできないような、政治史でもあり、社会史でもあり、地域史でもあって、という、何だかよく分からないけど、全体としてすごくダイナミックで面白いという、そういう像が描けるので非常に面白いですね。

現在のところ、僕以外に研究やってる人、世界にいませんので、あんまりちょっと宣伝できてないのが自分の怠惰なんですけれども、これはまたどんどん周知もしていきたいなと思っています。

課題としては、一点最後に言って終わりますと、長谷川先生もよくご存じやと思うんですけれども、細かく言うと幕末の最晩年ですね、慶応三年とか戊辰戦争直前とか直後の史料がやっぱり残ってなくて、伝記とか後世の語りでは、こういう長州藩士と牢屋で知り合ってみたいな、楽しい、面白いエピソードがあるんですけれども、それを確認することができない。つまり、分かりやすく言えば、西園寺公望と出会う直前ある

いは前後のことですね。戦争の軌跡とかは分かるんですけれども、政治史的なその辺の実態解明というのが、現状残ってる中川家史料ではちょっとどうしても限界があって、ここはちょっと、ほかでも史料を探したりしながら、今後、発展させていくというのが課題であり、やっていきたいなと考えています。

○山崎

ありがとうございます。

次に、幕末から維新期にかけてということになると、長谷川先生にもお話を伺ってもよろしいですか。田上綽俊関係とかは長谷川さんが一番詳しいでしょうし。少年期に関する研究成果、そして今後の課題についてお話しいただけるとありがたいです。

○長谷川

中川家の史料には幕末維新期の史料がたいへん多く含まれています。禄左衛門や武平太、叔父の百助の従軍日記をはじめ貴重な史料が残されています。馬路の両苗郷士の活躍について岡本幸雄先生の論文などもありますが、山陰道鎮撫使や弓箭組についてまとめられた論文とか著作はないようにうかがっています。戦前に中川小十郎が禄左衛門の手記などをもとに『戊辰唱義録』を著していますけれど、それぐらいしかないというのが現状じゃないかと思います。

山陰道鎮撫のことは『立命館百年史』や『西園寺公望伝』に西園寺の事績として触れられてはいますが、京都の「時代祭」の弓箭組も山国隊ほどは知られていないようです。二〇一五年一〇月の「土曜講座」で、私が山陰道鎮撫の、寺澤さんが北陸征討の話をさせていただいたことを思い返しています。かつて、岩井忠熊

先生から西園寺と中川一族や中川はなぜそんなに深い結びつきがあるのか知りたい、というようなことをうかがったことがありました。ほかの公家たちとは違う体験や結びつきが、西園寺と馬路の郷士たちのあいだにあったんではないかと思っています。

それから、山崎先生からご指摘のあった小十郎の少年時代のことですが、『史資料センター紀要』に、馬路の小学校の教師の田上綽俊の書簡を読んで紹介させてもらいました。九州（佐賀）の郷里へ帰った恩師の田上に東京の学業などの報告をする小十郎の姿に、師弟の絆の温かさを感じました。とかく禿頭（はげ頭）で強面（こわおもて）のおじさんの中川小十郎のイメージがありますが、老教師と一緒に写ったおかっぱ頭の小十郎少年の一枚の写真とあわせて新しい中川小十郎の一面を伝えてくれると思っています。

○山崎

ありがとうございました。

続いて青少年時代の彼の形成期について、藤野さんからお願いします。藤野先生は明治期の教育史がご専門のところなので、ぜひそのあたりのお話をいただければ幸いです。

○藤野

私は、具体的には青少年、少年期、青年期にかけての論文、そして彼の学歴や、その学習経験というようなところで論文を書かせてもらいました。

そのほか、またそれ以外の書き切れていないところも含めて、とにかく中川小十郎の青年期までの経験というのを少しずつ考えたりしているのですが、先ほど長谷川先生がおっしゃった、西園寺と中川が何でそん

なに仲が深いんだというところの話ですけれども、やはり、中川謙二郎という人の存在が非常に大きい、そういうふうに思います。

中川謙二郎は、小十郎の叔父さんにあたる人ですけれども、実は西園寺公望が中川の一族の中で一番誰と仲がよかったかというと、謙二郎なんですよね。中川謙二郎は、彼は最初に東京に行って英学を修めるということをするのですが、その謙二郎を東京に誘ったのが西園寺公望なんです。これが史料上、明らかでして、小十郎に宛てた、あのびりびりに破れた手紙の中で謙二郎が自分の思い出話として書いています。その手紙のなかでは、自分は西園寺さんに誘われて東京で英学を修めることになった、そのときの経験が自分にとっては人生を切り開く非常に大きなきっかけになったから、だから今度は小十郎も自分の誘いに乗って、東京に来いというような誘いをしているんです。西園寺が謙二郎を誘い、謙二郎が小十郎を誘うというような形で中川小十郎が亀岡から出立をするという、そういう事情があるわけですよね。

その後、中川小十郎は謙二郎の住んでいた家で間借りをして住んでいましたが、そこからの経験というのは、先ほども話しましたように、中川謙二郎の周辺にいた人物、学者連中たちと小十郎は付き合いを始めます。

中川小十郎は様々な経験を経て、ようやく帝大に入りますが、帝大に入るその前の話もありますね。

青年期の中川小十郎は、当時のいわゆる啓蒙思想家と言われる人たちとの関係を持っていて、まだ深くはやられていない、あまり分かっていないんですが、小十郎の回想の中に杉亨二（すぎこうじ）という名前が出てくるんですね。杉亨二という人は、日本の統計学の祖といわれるような人物ですが、その人の家でしばらく学問修業をしていたというような記録もあったりします。

さらに、帝国大学に入った後の人脈関連でいえば、『教育報知』という雑誌があるんですけれども、そこの幹事として働いていたという経験も持っています。『教育報知』というのは、これは現代では非常にマイナーな雑誌ですが、戦前期では、『教育時論』という非常に有名な雑誌があって、そこと『教育報知』が教育界の雑誌を二分していました。その『教育報知』の幹事を中川小十郎は学生時代にやっていました。そして、そこの社長である日下部三之介との関わりで森有礼文部大臣期の教育政策を言論的に支援していました。これはおそらく自分から関わったというよりも、謙二郎が関わらせたんじゃないかと。謙二郎も『教育報知』の創立期に論文をいくらか載せていたりするので。

そういうような経験を持ったうえで、中川は「男女の文体を一つにする」という今でも時々言及される文体論の論文を出しますけれども、それが出された経緯なんかも『教育報知』や日下部や謙二郎との関わりの中で理解した方がいい。謙二郎の中川小十郎に対する評価は低いですから。勉強が足りないみたいなことを色々な手紙のなかに書いているので。いろいろと謙二郎が、これをやりなさい、あれをやりなさい、あそこに行きなさい、この人に会いなさいというような形で様々な人に関わらせていく、そうした環境下で中川小十郎は青年期の学習経歴を積んでいったのだと思います。

もう一つ、まだ論文になっていないところで非常に面白いというか、すごい話だなと思ったのは、帝大在学時代に中川小十郎が井上毅の家に養子に入りかけるという話があったことです。これ、どういう経緯かと言いますと、当時、帝国大学で中川小十郎の指導をしていたのが、後に京都帝大を一緒につくる木下広次でした。木下広次と井上毅は親戚関係にありますので、井上毅が、当時、自分の家に娘しかいない、娘しかい

ないので、憲法とか、自分が関わった国家事業についての資料の保存が、この後どうなるかが非常に心配だと、それを何とか保存をしてくれるような男子を養子に欲しいんだというようなことを木下広次に問い合わせます。木下広次が中川小十郎を候補に挙げて、中川小十郎に実際に話を持っていくということがありました。中川は養子に行きたかったようで、それを養父の武平太に問い合わせた書簡があります。

結果としては、武平太がおまえは中川家の嫡男だろうということで反対されてしまうのですが、そういうように、普通の帝大生とは少し小十郎は扱いが違っていたようなんです。

他にも大学時代の夏休みに文部省の次官から資金を得て、東北の教育事情の調査に行ったりもしていました。それも手紙が出てきていて、やはり少し変わった学生時代の経歴を持っています。恐らくそれの背後にいたのは謙二郎であろう。まだ、これは証明されていませんが、そういう中川小十郎が学生時代につながっていた人たち、そしてそれがどこで、どういう人たちを媒介にしてつながっていたのかというところまで明らかにすれば、もう少し深く彼の青年期の部分というのは分かってくるかなと。そして、それが、学校を創るというところの話にまでつながっていくんじゃないかなと期待を込めて考えています。これが、私の研究から見た課題かなと思います。

○山崎

ありがとうございました。

そうしたら、その後の植民地官僚時代ということで、眞杉さん、十河君お願いします。

○眞杉

私がやったのは、ちょうど樺太時代です。明治の四一年から大正元年ぐらいかな、明治四五年まで、中川小十郎は樺太庁の第一部長として勤めるということで、その時期を研究しておりました。

個人的に、もう既に出した研究論文なんですけれど、この中の皆さんとちょっと立場が違うのかなというところは、結局、最終的に私が書いた論文ですね、樺太の漁政、魚の漁の話というのと、木材乾留というすごくニッチなものを扱ったんですけれど、最終的にそれが中川小十郎の意思によるものであるというところまでは詰め切れなくて、むしろ中川小十郎の手元に残っている樺太庁の史料から見ていくと、樺太庁で一所懸命運営をしている官僚たちというのが、どんなプレッシャーの下に運営せざるを得なかったのかというお話を明らかにしていったのかなというところです。

なので、いわゆる近代日本における植民地としては、あまり研究というのがない樺太なんですけれど、中川家史料を見ると、とても面白い、貴重な情報というのが分かりますよということで研究をさせていただきました。

個人的には、それについてはある程度の成果というのは上がったのかなとは思っていますが、その一方で、やっぱり中川小十郎にとって樺太って何だったのかという話としては、私の中でもう一つ、次の課題として残っているかなと。

といいますのは、樺太庁ですね、明治四五年の九月に、なので大正元年ですかね―の九月にもう辞めてしまうんですけれども、その後も樺太関係の史料というのは、点々と中川家史料内に残っておりまして、昭和

期に入っても、大泊の埋め立てとか、そういった形の史料が残っているので、恐らく、いわゆる官僚でそこに赴任をしたから樺太経営にだけずっと注力していたというだけでは、ちょっと説明し切れないものがあるんじゃないかなということは思っています。

なので、今後、そうですね、昭和期にも視野を広く、ちょっとスパンを長く取りまして、特に樺太植民地に対する中川小十郎の考え方とかというのは明らかにしていけたらいいのかなということは考えてます。

○山崎

はい、ありがとうございます。

じゃあ、十河さん、台湾中心にお願いします。

○十河

そうですね、台湾に関してはですね、研究する上での難しさというか、壁がありまして、一つは、ここに残ってる史料が少ないということがありまして、やっぱり外から史料を見つけてこないと、なかなか難しいという史料状況があります。だから台湾の頭取時代の中川小十郎の活動をつまびらかにするというのはなかなか容易ではないんですよ。

その中で、僕が取った手法は、軸足は中川個人の植民地をどう発展させていくかという思想に置きながら、その中川の思想とか行動というのが、ある種、彼の発言を基に、それが台湾の実際に起きた状況というのとどうつながっているのかを明らかにして、そこから台湾時代の中川小十郎の影響力というところを明らかにするというふうな手法を取ってきました。

台湾銀行頭取時代の中川については、それでいけたと思うんですけれども、その後の中川の活動まで広げようと思うと、台湾銀行自体をとってみても、一九二七年の台銀事件を機に台湾銀行自体の影響力が減退して、中川のやろうとした南進の政策というのも一旦破綻するということで、中川の台湾に対する影響力というのをどうつなげていこうかというのが難しくて、悩んでるとこでした。

ただ、中川の発言って、すごい影響力を与えられるという部分が一方ではあると思うんですよ。外部の史料を見ていても、当時の台湾における論壇で活躍していたいろんな人が中川の発言を引用しているという史料が見られる。もちろん批判的なものもありますけれども、すごく肯定的にとらえている発言というのもあるというところで、中川のやろうとした活動自体が挫折するのと、中川の発言というのが、その後、脚光を浴びるというのは別で、その周りから、台湾銀行頭取時代の中川小十郎って何だったのかというのを、もう少し台湾に軸足を置いて、長いスパンの中で位置づけるという作業が必要かなと思っています。

ただ、個人の伝記を作るのと研究の史料を活用していくということのはざまというのが結構難しいんですけれども、大正の前半期、副頭取時代の中川が何をしていたかというのは、まだ全然扱い切れてないところですので、台湾銀行の経営自体は経済史で結構明らかにはされているんですけれども、それを中川個人に当てて、その前半期というのをどう明らかにしていくかという課題は残っているかなと思います。

○山崎

ありがとうございました。

以上ご紹介いただいたように、各自がそれぞれの視点から中川小十郎について研究されているわけですが、

そろそろまとめに入ろうと思います。

中川小十郎の政治家としての側面については、吉田武弘君が幾つか研究論文を書いています。また元老としての西園寺については十河君が幾つか論文を書いていますよね。ところが西園寺と中川が具体的にどのようにつながっていて、世の中にどのような影響力を行使していったのかについては、もうちょっと詰めなくてはいけないところがいっぱいありそうですよね。

あとは、教育者としての中川、すなわち彼が教育者としてどのような思想と行動を展開していたのかについては、案外この研究グループの中ではあまりメインに扱われてこなかったところがあって、当たり前過ぎるからかもしれないんですけれども、実際に大学で彼が、ないしは中学で彼がどういうふうに考え、どういう行動をしたのかって部分に関しては、小林さんと木多君の禁衛隊の研究がありますが、他にもいくつかトピックを設けて深く掘り下げる必要があるだろうと思います。私の論文で取り扱ったような、戦前の教育の在り方が、卒業生の戦後の活躍により、戦後社会にどのようにつながっていったのかなども、まだまだ研究の余地がたくさんありそうです。やはりそのあたりは、豊富な学園の史料を駆使して、もっと徹底的にやっていくべきだと思いますね。

さらに、実業家としての中川に関しては、これまでこの研究グループにおいても、ほとんど扱われていない。そのあたりの分析が十分になされているとは言い難いところがあると思います。

というわけで、そろそろまとめに入ります。今日のこの座談会から見えてきたことは、大きく言って二つに整理できると思います。

一つは、これまでも学園の所蔵史料である中川小十郎関係史料を使った研究は多彩に展開されてきたものの、それを補うものとして外部研究機関、図書館などにある史料群を、本格史料調査・収集していく必要があるということです。今後中川について本格的な伝記編纂をしていくということになると、やっぱり学園として、ちゃんと伝記編纂室をつくって、外部への、台湾とかね、海外も含めて、外部への史料調査をもっと徹底的にやっていき、中川の事跡についての研究を深めていく必要があるんだろうと。内部史料だけでは、そろそろ限界かなという感じが見えてきたということが各分野から浮かび上がるように思います。

そしてもう一つは、やはりこれまで多くのメンバーが関わってやってきましたけれども、必ずしも中川の全てを明らかにするほど、それぞれの分野に人を配置してやってきたというわけではないので、やはり今まで研究されてない分野や、今まで研究が若干弱かった分野というのが実際のところとしては幾つかあるということですね。ですから、そういう分野に関しても、これから研究を広げていって、そういう中で、結局中川とは何だったのかという大きな視点の構築につなげていかなければいけないと思いますが、いかがでしょうか。

そういうわけで、この二つの課題を受けて、大きく研究を展開していくには、やはり大きな組織と人員と予算が必要なのではないかと思います。そしてその機はもう十分に熟しているのではないだろうかと。寺澤さんはじめ多くのメンバーが苦労してつくり上げた基礎整理も一応の完成を見て、本格的な研究に取りかかるための準備はもう十分に整っていると思うので、あとは、学園がご決意を固めていただき、ぜひ本格的な作業に着手されることを私としては願ってやまないということですね。

奈良（英）さん、そんな感じでいかがでしょうか。

○奈良（英）

ありがとうございます。最後のところで、一点だけ、事務局のほうからテーマとして加えてほしいのは、実業家としての中川小十郎の中に、学校経営者としての中川小十郎というのもぜひテーマにしてほしいなというのを思いますね。

今年出た名古屋大学伊藤彰浩先生の『戦時期日本の私立大学』がありまして、これが戦争中の私学の経営だけにテーマを絞っているのです。その中で立命館の戦時中の私学経営を例示としてかなり取り上げておられるんです。要は立命館大学は当時の国策をうまく利用してしたたかに生き延びた、どころか経営規模を拡大しているというまとめ方をしてるんですね。そういう点でも、私学の経営者としての中川小十郎というのは、ちょっと他の経営者とは違うというふうに見られているということがございます。

○山崎

はい。ありがとうございます。そろそろ時間ですので、木多君と小林さんにももっと語っていただきたかったのですが、ご容赦ください。今後、大いなるご活躍を、お二人には期待しております。

ということで、今日の座談会としては予定の二時間も過ぎましたので、このあたりで終わりとさせていただきます。本日は長時間のご参加まことにありがとうございました。

（了）

＜資料＞　中川小十郎関係年表（抄）

西暦	和暦	月	出来事（網掛けは小十郎に関する事柄）
1866	慶応2	1	中川小十郎 京都府丹波国桑田郡馬路村（現 亀岡市馬路町）に誕生（1月4日）
1867	慶応3		
1868	明治元年	1	西園寺公望　山陰道鎮撫総督　中川禄左衛門、武平太、百介ら「弓箭組」従軍
1868	明治元年	6	西園寺公望　会津征討越後口総督府大参謀
1869	明治2	9	西園寺公望　私塾「立命館」を創始
1870	明治3	4	私塾立命館に差留命令（私塾立命館の閉鎖）
1871	明治4	3	西園寺公望　フランスパリに到着。フランスパリコミューンの成立宣言
1872	明治5		
1873	明治6		中川小十郎　馬路村小学校通学（推定）
1874	明治7		田上綽俊（しゃくしゅん）　馬路村に招聘される
1875	明治8		田上綽俊　馬路村小学校校長　就任（致遠館小学校と改称）
1876	明治9		
1877	明治10	3	中川小十郎　馬路村　致遠館小学校下等科　卒業（推定）
1877	明治10	12	中川小十郎　田上綽俊について京都遊学
1878	明治11	3	中川小十郎　田上綽俊に随従し能登七尾へ行く
1879	明治12	9	中川小十郎　上京　叔父中川謙二郎宅に寄寓 東京府第一中学（現 東京都立日比谷高校）入学　同級生に塩原金之助（夏目漱石）
1880	明治13	8	西園寺公望フランス留学から帰国（横浜港）
1881	明治14	12	中川小十郎　東京府第一中学を退学　成立学舎（予備校）に通う
1882	明治15	10	中川小十郎　立志歌を詠む
1882	明治15	11	中川小十郎　東京専門学校（現在の早稲田大学）入学
1883	明治16		
1884	明治17	9	中川小十郎　東京専門学校　退学　東京大学（明治19年より　帝国大学）予備門　入学 同級生に塩原金之助（夏目漱石）、平岡定太郎、太田達人、南方熊楠など 成立学舎の出身者が中心になり中川小十郎、夏目漱石、中村是公、太田達人、佐藤友熊、橋本左五郎らとともに「十人会」を組織する
1885	明治18		
1886	明治19		
1887	明治20	7	中川小十郎・山田美妙　雑誌『以良都女』（いらつめ）発行
1888	明治21		
1889	明治22	7	中川小十郎　第一高等中学（旧　予備門）　卒業　帝国大学（現東京大学）法科大学法律学科　入学
1889	明治22	9	中川小十郎　帝国大学法科大学政治学科へ転籍
1890	明治23		中川小十郎　R・ボーカー『実用経済学』を翻訳　冨山房より刊行
1891	明治24		
1892	明治25		
1893	明治26	7	中川小十郎　帝国大学法科大学政治学科卒業　文部省　入省
1894	明治27		西園寺公望　文部大臣　就任
1895	明治28		中川小十郎　文部大臣秘書官　就任
1896	明治29	1	西園寺公望文部大臣　「東京及ビ京都ノ帝国大学基本金トシテ交付セラレンコトヲ請ウ」と演説
1897	明治30	3	成瀬仁蔵を中心として日本女子大学校創立発起人会　結成

＜資料＞　中川小十郎関係年表（抄）

西暦	和暦	月	出来事（網掛けは小十郎に関する事柄）
1897	明治30	6	京都帝国大学設立　初代総長木下広次　中川小十郎書記官（初代事務局長）
1898	明治31	5	中川小十郎　日本女子大学校創立委員会幹事長　就任
1898	明治31	7	広岡浅子、成瀬仁蔵を介して中川小十郎に加島屋（広岡家の屋号）の再建を依頼
1899	明治32	2	中川小十郎　広岡家鉱業部理事（大阪）　就任 中川小十郎　株式会社堂島米穀取引者監査役（大阪）　就任（月は推定）
1899	明治32	4	中川小十郎　真宗生命株式会社筆頭取締役（大阪）就任
1899	明治32	6	中川小十郎　真宗生命改め朝日生命保険株式会社、筆頭取締役副社長（大阪）就任
1899	明治32	10	京都法政学校創立事務所（朝日生命保険本社 京都市六角麩屋町西入ル）設置
1900	明治33	5	中川小十郎　私立京都法政学校　創立
1900	明治33	6	私立京都法政学校、上京区東三本木丸太町上ル仲之町の仮校舎（清輝楼）で開校
1901	明治34	12	仮校舎から、上京区清和院口寺町東入ルの広小路新校舎に移転
1902	明治35	3	中川小十郎　朝日生命、護国生命、北海生命合併成功さす　大同生命（現　大同生命保険株式会社）とする　同社筆頭取締役就任
1902	明治35	9	中川小十郎　加島銀行理事、大阪堂島米穀取引所監査役　辞任
1903	明治36	3	中川小十郎　大同生命保険株式会社　退社
1903	明治36	6	中川小十郎　京都帝国大学書記官　再任用
1904	明治37		
1905	明治38	4	西園寺より「立命館」の名称継承の許諾を得る
1905	明治38	4	西園寺より「立命館」の大扁額を寄贈される
1905	明治38	9	私立京都法政大学附属普通学校として「私立清和普通学校」を創立
1906	明治39	1	第1次西園寺内閣　成立
1906	明治39	4	中川小十郎　総理大臣秘書官　就任
1907	明治40		
1908	明治41		第1次西園寺公望内閣　総辞職
1908	明治41	7	中川小十郎　樺太庁第一部長　任官
1909	明治42		
1910	明治43		
1911	明治44	8	第2次西園寺内閣　成立
1912	明治45 大正元	9	中川小十郎　樺太庁第一部長　辞職　台湾銀行副頭取　就任
1913	大正2	12	中川小十郎　財団法人立命館理事　就任
1914	大正3		
1915	大正4		
1916	大正5	9	中川小十郎　京都市長候補に選任されるも、固辞
1917	大正6		
1918	大正7		
1919	大正8		
1920	大正9	8	中川小十郎　台湾銀行頭取　就任
1921	大正10		
1922	大正11		
1923	大正12		
1924	大正13		

＜資料＞　中川小十郎関係年表（抄）

西暦	和暦	月	出来事（網掛けは小十郎に関する事柄）
1925	大正14	8	中川小十郎　台湾銀行頭取　辞任　立命館館長職に専念する
1925	大正14	12	中川小十郎　貴族院議員　就任
1926	大正15 昭和元		
1927	昭和2		
1928	昭和3	4	寄附行為改正、総長制を廃して館長制を制定 中川小十郎　館長就任(1929年2月まで中学校長を兼務)
1928	昭和3		
1929	昭和4		
1930	昭和5		
1931	昭和6	7	職制改正、館長を総長と改称 中川小十郎　初代総長に就任
1932	昭和7		
1933	昭和8	8	中川小十郎　中学校・商業学校両校校長を兼任（1941年まで）
1933	昭和8	9	京大事件で退官した教授・助教授ら18名を招聘
1934	昭和9		
1935	昭和10		
1936	昭和11		
1937	昭和12		
1938	昭和13		
1939	昭和14		
1940	昭和15	11	西園寺公望死去（11月24日）<満90歳>
1940	昭和15	12	西園寺公望を学祖とすることを決定
1942	昭和17		
1943	昭和18		
1944	昭和19	10	中川小十郎　死去。（10月7日）＜満78歳＞

年度	中川小十郎関係史資料整理・研究状況	研究成果公表・史料活用状況	研究員（中川小十郎研究チーム）
1959	**【第一次整理】**白雲荘所蔵資料の移管、図書館貴重書庫内資料		
1977 ～ 1988	学内教職員による私的研究会「中川小十郎研究会」主催　松本皎	『立命館・中川小十郎研究会会報』 1号～12号	
1982	**【第二次整理】**中川家養家より寄贈史料	「中川家文書」として百年史編纂室で調査・整理 『立命館百年史　通史一』に活用 亀岡市史編纂室による調査・整理 『新修亀岡市史』に活用	
1993		松本皎「中川小十郎と京都帝国大学設立事情および京都法政学校の創設」（『立命館百年史紀要』第1号　1993）	
1994		松本皎「学園創立者中川小十郎の事績抄―中川小十郎先生五十回忌（一九九三年十月）を迎えて―」（『立命館百年史紀要』第2号　1994） 西岡成幸「史料紹介　中川家文書」（『立命館百年史紀要』第2号　1994）	
1996		長　志珠絵「中川小十郎の言文一致論をめぐって」（『立命館百年史紀要』第4号　1996）	
2000		岩井忠熊「中川小十郎覚書」（『立命館百年史紀要』第8号　2000）	
2005		松本皎「桃山泰長老の蓑笠亭主人～中川小十郎と作家・文人墨客たち～（『立命館百年史紀要』第13号　2005）	
2008		田村将人「中川小十郎宛て葛西猛千代書簡の樺太アイヌのストー（スキー）について」（『立命館百年史紀要』第16号　2008） 松本皎「中川「塔之段」旧邸と立命館「白雲荘」校宅の百年」（『立命館百年史紀要』第16号　2008）	
2009	**【第三次整理】**中川家生家より寄託史料（後に寄贈となる） ＜史資料センター佐々木課長より山崎教授に整理・調査の相談＞		
2010	生家史料の整理と概要調査の実施 古文書・書画・モノ史料の第一次整理 「概要調査（箱別）目録」の作成（長谷川・宮崎）、「史料（仮）目録」の作成（寺澤・長谷川・松平）	**＜論文・報告等＞** 長谷川澄夫「中川小十郎生家資料の概要調査について」（『立命館百年史紀要』第19号　2011）	長谷川澄夫（2010.4～） 寺澤優（2010.11～2011.3） 松平智史（2010.11～2011.3）
2011	中川家関係史料の全体像の把握 （生家史料）「（仮）目録」の作成、（田村・長谷川）「小十郎書簡目録」の作成・ （養家史料）「雑」の概要調査/「中川家文書目録」の電子データ作成 ・図書館貴重書庫などの調査（「概要調査」/「概要目録」/「箱75「資料目録」」 ＜中川小十郎研究会＞第1回　12月（主催：山崎有恒教授）	**＜論文・報告等＞** 山崎有恒「中川小十郎研究会の立ち上げについて」（『立命館百年史紀要』第20号　2012） 百年史編纂室「図書館貴重書庫資料・調査報告」（『立命館百年史紀要』第20号　2012） 田村悠「中川小十郎（生家）資料・整理報告―整理結果およびその特徴について」（『立命館百年史紀要』第20号　2012）	長谷川澄夫 田村悠（2011.3～2012.3）
2012	中川家史料の再整理 （生家史料）返却資料の選別・撮影（長谷川） 小十郎関係書簡の再整理（田中） （養家史料）①「中川家文書」の再整理（田中） ②亀岡市史資料調査資料の電子データの作成と再整理（寺澤） ③「雑」資料の整理と「資料目録」の作成（長谷川） その他・台湾関係資料の調査（中央学院/総務依頼調査）など ＜中川小十郎研究会＞第2回　1月 ＜中川小十郎研究会＞第3回　2月 ＜中川小十郎研究会＞第4回　4月 ＜中川小十郎研究会＞第5回　5月	**＜論文・報告等＞** 山崎有恒「中川小十郎研究会報告」（『立命館百年史紀要』第21号　2013） 田中有美・寺澤優・長谷川澄夫「「中川家資料」について-資料調査・整理報告」（『立命館百年史紀要』第21号　2013） 田中有美「中川小十郎の休暇観と立命館」（『立命館百年史紀要』第21号　2013）	長谷川澄夫 田中有美（2012.4～2013.3） 寺澤優（2012.5～）

年度	中川小十郎関係史資料整理・研究状況	研究成果公表・史料活用状況	研究員（中川小十郎研究チーム）
	＜中川小十郎研究会＞第6回　6月 ＜中川小十郎研究会＞第7回　7月 ＜中川小十郎研究会＞第8回　9月 ＜中川小十郎研究会＞第9回　10月 ＜中川小十郎研究会＞第10回　12月		
2013	中川家資料の再整理 （生家史料）（養家史料）（「雑」資料）の再整理と整理方針調整と目録付番等の確定。方針に従い整理。2014年度末に目録完成を目指す。		長谷川澄夫 寺澤優
2014	中川家史料の再整理	2015年3月 「中川家史料目録」 完成	長谷川澄夫 寺澤優（～2015.3） 藤野真挙（2014.5～）
2015	学内未整理資料調査、学外関連史資料調査 既存史資料の保存・その他既存史資料中の未整理分の整理	**＜展示会＞** 2015年6月　朱雀キャンパス展示「小十郎を育てた人々―中川小十郎誕生から京都法政学校創立まで」 2015年9月　朱雀キャンパス展示「創立者中川小十郎誕生と立命館草創期をめぐる人々―小十郎が活きた場所―」 2015年11月　朱雀キャンパス「創立者中川小十郎誕生と立命館草創期をめぐる人々―京都法政学校の教育理念―」 **＜講演会＞** 2015年10月　第3143回立命館土曜講座　長谷川澄夫「幕末の中川家（弓箭組と北陸道鎮撫）山陰道鎮撫総督と馬路のひとびと―西園寺公と中川家のひとびとの出会い―」（『立命館学園のあゆみ―『立命館百年史』編纂と中川家史料―』2015年10月17日） 2015年10月　第3143回立命館土曜講座　寺澤優「幕末の中川家（弓箭組と北陸道鎮撫）北越戦争と中川家―戊辰戦争における京都・丹波地域の郷士―」（『立命館学園のあゆみ―『立命館百年史』編纂と中川家史料―』2015年10月17日） 2015年10月　第3144回立命館土曜講座　藤野真挙「中川小十郎と草創期立命館」（『立命館学園のあゆみ―『立命館百年史』編纂と中川家史料―』2015年10月24日） **＜発行物＞** 2016年3月 「立命館人物伝　立志の気概　中川小十郎　立命館創立ものがたり」発行	長谷川澄夫 藤野真挙 眞杉侑里（2015.4～）
2016	学内未整理資料調査、学外関連史資料調査 既存史資料の保存・その他既存史資料中の未整理分の整理	**＜展示会＞** 2016年4月　衣笠図書館展示「中川小十郎生誕150年記念　ミニ展示　中川小十郎　立命館創立ものがたり展」 2016年5月　OIC図書館展示「立命館大学創立ものがたり～中川小十郎と広岡浅子～」 2016年7月　亀岡市文化資料館展示会　協力「中川小十郎―馬路村より立命館創立者へ―」 2016年10月　朱雀展示「中川小十郎生誕150年記念　中川小十郎の生涯と人物像展」 2016年11月　衣笠図書館展示　「中川小十郎の生涯と人物像展」 **＜講演会＞** 2016年7月　亀岡市講演会『亀岡の先人中川小十郎（教育功労者）』 眞杉侑里「中川小十郎と樺太」、藤野真挙「青年中川小十郎の学習風景」 2016年7月　亀岡生涯学習市民大学第2講『亀岡の偉人　中川小十郎の生涯』山崎有恒 2016年8月 亀岡市文化資料館講演『中川小十郎を育んだ亀岡のひとびと―中川家史料から―』長谷川澄夫 2016年8月　亀岡市文化資料館講演『イノベーター　中川小十郎の挑戦』藤野真挙 2016年10月22日　朱雀キャンパス講演会　記念講演会『立命館創立者　中川小十郎の思いをつなぐ』 基調講演「記憶の種をまく―明治から未来へ―」彬子女王 パネルディスカッション　司会：小野田真由美　彬子女王・西山伸・池田裕子・山崎有恒 2016年11月 平井嘉一郎記念図書館開設記念講演会『中川小十郎の教学理念と戦後を創った卒業生たち』山崎有恒 2016年12月　第3188回立命館土曜講座　眞杉侑里「中川小十郎と樺太開発」（『中川家と近代日本』2016年12月3日）	長谷川澄夫 藤野真挙（～2017.3） 眞杉侑里（～2017.3） 十河和貴（2016.4～） 菊池なぎさ（2016.7～） 小林愛恵（2017.2～） 木多悠介（2017.3～）

年度	中川小十郎関係史資料整理・研究状況	研究成果公表・史料活用状況	研究員（中川小十郎研究チーム）
		2016年12月　第3189回立命館土曜講座　奈良勝司「幕末維新期の政治と中川家」(『中川家と近代日本』2016年12月3日)	
		＜フィールドワーク＞	
		2016年9月　中川小十郎ゆかりの地を巡るバスツアー共催	
		＜論文・報告等＞	
		長谷川澄夫「中川小十郎を育んだ亀岡のひとびと」(『第61回企画展　中川小十郎生誕150周年記念　中川小十郎―馬路村より立命館創立者へ―』亀岡市文化資料館　2016)	
		藤野真挙「中川小十郎の「中等社会」論と京都法政学校」(『第61回企画展　中川小十郎生誕150周年記念　中川小十郎―馬路村より立命館創立者へ―』亀岡市文化資料館　2016)	
		奈良勝司「人見・中川両苗と新選組－幕末における二つの「郷士」集団－」(150記念誌　2017)	
		長谷川澄夫「中川小十郎の少年時代-田上綽俊書簡を読む－」(150記念誌　2017)	
		藤野真挙「明治ナショナリズムと中川小十郎のキャリア形成」(150記念誌　2017)	
		眞杉侑里「植民地樺太の特質－庁制初期における樺太開発-」(150記念誌　2017)	
		十河和貴「大正～昭和初期における中川小十郎の政局観と行動－植民地統治・積極財政の視点－」(150記念誌　2017)	
		池田裕子「樺太最初の中学校創設　中川小十郎の役割に着目して」(『立命館大学社会システム研究所　社会システム研究 』(33), 1-26 (2016-09))	
		＜発行物＞	
		2016年4月　立命館大学HP「立命館の灯―中川小十郎　立命館創立ものがたり」掲載	
		2017年3月『立命館創立者生誕150年記念　中川小十郎研究論文・図録集』発刊	
2017	学内未整理資料調査、学外関連史資料調査 既存史資料の保存・その他既存史資料中の未整理分の整理	**＜論文・報告等＞**	長谷川澄夫 十河和貴 菊池なぎさ 小林愛恵 木多悠介 寺澤優(2017.10～)
		山崎有恒「中川小十郎の教育理念と戦後を創った卒業生たち－戦前期立命館大学再考－」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		寺澤優「【史料紹介】二〇一三～一五年における「中川家史料」整理の概要と報告」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		奈良勝司「人見・中川両苗の由緒意識と近世～幕末社会」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		木多悠介・小林愛恵・十河和貴・長谷川澄夫【史料紹介】「「中川家史料」田上綽俊書翰」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		藤野真挙「明治ナショナリズムと中川小十郎のキャリア形成（二）－東北地方小学校教員の統計調査経験－」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		眞杉侑里「樺太庁制初期における入植と産業振興の問題－植民地樺太に対する期待と産業方針－」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		十河和貴「台湾銀行頭取時代の中川小十郎と南進への理想－戦後不況と積極的財政整理方針の終焉－」(『立命館史資料センター紀要』第1号　2018)	
		＜講演会＞	
		山崎有恒　「中川小十郎にとっての「アジア」」(シンポジウム「Think Asia―アジア理解講座」2017)	
		＜発行物＞	
		2018年3月『立命館史資料センター紀要』第1号	
2018	学内未整理資料調査、学外関連史資料調査	**＜論文・報告等＞**	長谷川澄夫 十河和貴 菊池なぎさ(～2019.3) 小林愛恵 木多悠介 寺澤優
		寺澤優「中川小十郎の震災体験と民間警衛組織構想」(『立命館史資料センター紀要』第2号　2019)	
		佐藤太久磨「植民地台湾と「分化」概念の交叉―東郷実と中川小十郎―」(『立命館史資料センター紀要』第2号　2019)	
		長谷川澄夫「中川小十郎の先考顕彰と太田亮」(『立命館史資料センター紀要』第2号　2019)	
		眞杉侑里「1930年満鮮見学旅行に見る大学配属将校の活動と立命館の距離」(『立命館史資料センター紀要』第2号　2019)	
		奈良勝司「幕末の馬路「郷士」と一橋慶喜」(『第63回企画展　山陰道鎮撫隊―丹波の郷士と幕末維新―』亀岡市文化資料館　2018)	

年度	中川小十郎関係史資料整理・研究状況	研究成果公表・史料活用状況	研究員（中川小十郎研究チーム）
		＜発行物＞ 2019年3月『立命館史資料センター紀要』第2号	眞杉侑里（2018.4～）
2019	学内未整理資料調査、学外関連史資料調査	**＜論文・報告等＞** 十河和貴「元老西園寺公望と「憲政の常道」－中川小十郎の活動を主軸として－」（『立命館史資料センター紀要』第3号　2020） 眞杉侑里「立命館出版部の組織構成に関する基礎的研究」（『立命館史資料センター紀要』第3号　2020） 山崎有恒「中川小十郎にとっての「アジア」」（『人物からたどる近代日中関係史』国書刊行会　2019） **＜発行物＞** 2020年3月『立命館史資料センター紀要』第3号	長谷川澄夫 十河和貴 小林愛恵 木多悠介 寺澤優 眞杉侑里 藤野真挙（2019.7～8、2020.1～2）
2020	中川家（生家史料）の内未整理、廃棄予定であった史料群の再整理	**＜論文・報告等＞** 木多悠介「立命館禁衛隊創設と学園経営」（『立命館史資料センター紀要』第4号　2021） 小林愛恵「昭和大礼警備体制における立命館禁衛隊とその役割」（『立命館史資料センター紀要』第4号　2021） 長谷川澄夫「中川小十郎編の未刊維新史稿本について」（『立命館史資料センター紀要』第4号　2021） **＜目録＞** 2020年10月「中川家文書（生家　書画）目録」完成 **＜発行物＞** 2021年3月『立命館史資料センター紀要』第4号	長谷川澄夫 十河和貴 小林愛恵 木多悠介 寺澤優 眞杉侑里 藤野真挙（2020.6-8、12-2021.2）

資料　中川小十郎　肖像

幼少期の小十郎と恩師　田上綽俊

小十郎 16 才

小十郎 14 才

成立学舎時代の集合写真
前列右小十郎（16 才頃）

小十郎 24 才

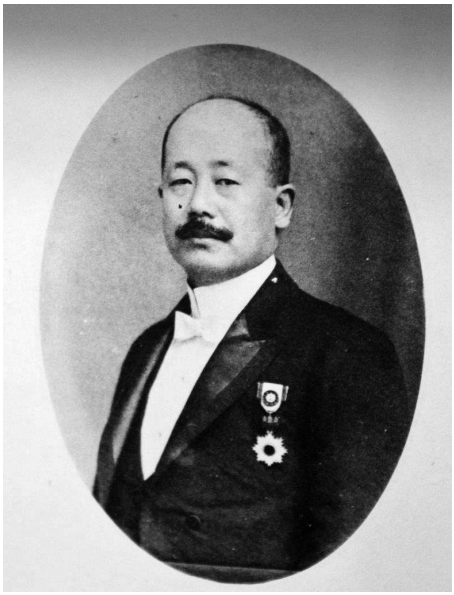
1893 年 7 月帝大卒業前後の記念写真
後列左　小十郎 26 才頃
前列右　夏目漱石

1897 年文部省参事官時代
30 才頃

1899 年加島屋時代の記念写真　32 才頃
中央左が小十郎、中央右が広岡家本家主人（9 代目九右衛門正秋）。

1903 年頃「京都法政専門学校」記念写真　36 才頃　中央が小十郎

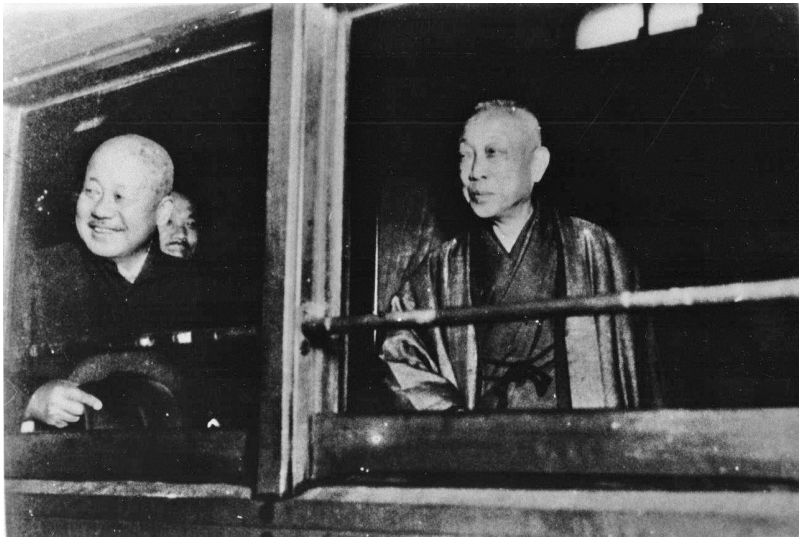
1908 年～ 1912 年　樺太庁第一部長時代　樺太にて。
右が小十郎 40 才代



1912 年～ 1920 年　台湾銀行副頭取
1920 年～ 1925 年　台湾銀行頭取
写真は副頭取時代
小十郎 50 才代

1925 ～ 1930 年頃　大学令による大学昇格後の立命館大学館長室の小十郎。
この時期大学経営に専念する。小十郎 60 才代

1930 年西園寺公望の私設秘書として、
坐漁荘で記者に対面する小十郎



撮影年不明。西園寺公望の供をする小十郎

撮影年不明。叔父中川謙二郎の書生仲間と。
中川謙二郎（前）、奥右一木喜徳郎（宮相）、奥中央岡田良平（文相）

1938 年頃。立命館日満高等工科学校建設予定地にて（現在の衣笠キャンパス）
右　本野亨。小十郎 73 才頃

立命館大学、中学校の卒業アルバムで定番として使用された小十郎の肖像写真